

日本語テキストにおける継起性の表現について

—「～てから」と「～あとで」の使い分けについて—

Expression of Sequential Events in Japanese Text
—Comparing the Usage of Conjunctions “te-kara” and “ato-de”—

内 山 潤

Jyun UCHIYAMA

1. はじめに

工藤（1995）では、日本語の基本的なアスペクトをスル形による完成相とシテイル形による継続相の2つに設定し、完成相はテキストにおいて継起性というタクシスを、継続相は同時性というタクシスを表すとして、アスペクトとテキストの関係についての研究に光を当てた。これによって、テキストを構成する文のアスペクトを分析することで、テキストが表す事態の時間構造を明らかにするという可能性が見えてきたと言える。

しかし、現実のテキストを見てみると、完成相の単文が連続して、事態の継起を表している例はあまり見られない。須田（2010）では、「動詞の表す動作自体によって、たがいに関係づけられているのではなく、接続詞などのコンテクスト的手段によって継起的な関係が表現されているものと考えられる。」として、完成相の持つ継起性を否定している。

しかし、以下のような用例を見る限り、継起性の存在を完全に否定するのは難しいと思われる。

- (1) 彼はかがんで皿洗い機に皿を入れてから立ち上がり、にっこりと彼女にほほ笑みかけた。マンディは体をこわばらせ、

相手の顔色をさぐった。いつも見慣れた非難がましい目つきはまるでない。エリックのまなざしは冷静そのもの、すねに傷もつ者は他人の批評などせぬがよいとわきまえているようだった。彼女はいくらか落ち着きをとりもどし、素直に認めた。
「酔っ払っていたみたいね」

(1)では、下線部の完成相の動作が、二重下線で表した動作を間に挟みつつ、継起的に表現されている。複文も含めて考えると、やはり完成相の述語によって、継起的に事態が進んでいくという文章の構造は一般的である。

継起性には、裸の完成相の連続以外にも様々な形で表現され得る。例えば「薬を飲んだ」「気分がよくなった」という二つの過去の事態を継起的に表現しようとする場合、継起を表す「～てから」「～あとで」だけでなく、理由を表す「～から」「～ので」、条件を表す「～たら」「～と」など様々な形で表現可能である。現実のテキストでは、完成相は、こうした様々な手段と共に用いられて、より複雑な形で事態の継起を表していると考えられる。

このため、現実のテキストで表される時間構造を分析するためには、従属節中の事態の時間的性質を理解した上で、完成相で表され

る継起性との関係、特にどのような事態が従属節として複文にまとめられ、どのような事態が述語として完成相で表されるか、という点を解明することが必要である。そこで、本研究では、そのための予備段階として、特に継起性を表すと考えられる従属節「～てから」と「～あとで」を取り上げ、その使い分けについて解明することを目指すことにする。

2. 「～てから」と「～あとで」に関する先行研究と本研究の目的

2.1 久野（1973）の研究

「～てから」と「～あとで」に関する研究は、久野（1973）に端緒を開く。久野では、「～てから」が相ついで起きる動作を指すのに対して、「～あとで」が、時間的に離れた動作を指すというそれ以前の研究について、

(2) a. 10時になってから家を出た。

b. ?*10時になったあとで家を出た。

のような組み合わせで、後者が非文法的となることを説明するとし、一定の有効性を認めている。しかし、以下のような例文の文法性・非文法性は説明できないとし、「意図的な時間の前後関係」という概念を導入している。

(3) 太郎がごはんを $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ? 食べてから} \\ \text{b. 食べたあとで} \end{array} \right\}$ 花子がやって来た。

(4) 雷が $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ? なってから} \\ \text{b. なったあとで} \end{array} \right\}$ 雨が降り出した。

(5) 家に $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ? 帰ってから} \\ \text{b. 帰ったあとで} \end{array} \right\}$ 太郎から電話がありました。

(6) 花子が $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ? 帰ってから} \\ \text{b. 帰ったあとで} \end{array} \right\}$ 太郎から電話がありました。

(7) 太郎は戦争が $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. ? 終わってから} \\ \text{b. 終わったあとで} \end{array} \right\}$ 死

んだ。

久野は上記の例文で、いずれも「～てから」の文法性が低くなることについて「上例に共通なことは、第一の事態と第二の事態との間に意図的な時間的前後関係がないということである」と説明している。以上の考察から、久野（1973）では、「～てから」と「～あとで」の違いについて、以下のようにまとめている。

S_1 テカラ S_2 S_1 の主語の意図的計画によって、 S_2 の直後に起きることを表わす。「以来」の意味にも用いられて得る。

S_1 タアトデ S_2 S_1 が起きてから不特定の時間がたった後、 S_2 が起きることを表わす。 S_1 と S_2 の間に意図的な時間の前後関係があってもなくてもよい。「以来」の意味にも用いることはできない。

2.2 久野以降の研究

ここでは、久野（1973）以降の研究において、久野の導入した「意図的な時間の前後関係」がどのように扱われてきたかを中心に、その後の研究を見ていく。

寺村（1983）は、「～まで」と「～までに」、 「～間」と「～間に」など用法上重なる時間的限定の諸形式の使い分けの研究の一環として、「～てから」と「～あとで」の違いについて言及している。寺村の出した結論は「P（テ）カラQという文型は、『Qという事態が生じるのは、Pという時点、あるいはPという行為、出来事、現象が起こったのちのことであって、それ以前ではない』ということ話を話し手が含みとして相手に伝えようとするところから出てくる表現形式であると考えられる。」のに対し、「一方のPアトデQは、そういう含みがなく、単に『P点以降にQという事象

が起こった』ということ述べるに過ぎず、(後略)」ということである。

久野 (1973) の意図的な時間的前後関係については、寺村 (1983) は、誰の意図なのか不明確であることを指摘した上で、次の2点の修正が必要なことを主張している。一点目は、「意図的關係づけというのは、Qが情意の表現であるときに表面に出てくる要素にすぎない」と考えることであり、二点目は「そのような関係づけをする主体が、Pの主語でもQの主語でもなく、少なくとも典型的には、描き手=話し手である」と考えることである。一点目について、寺村 (1983) は、「～てから」が持つ「それ以前ではない」という含みが、後件が情意(願望、命令、勧誘、忠告など)の表現のときに、「QはP以前にしてはいけない、まずPをして、それからQすべきだ」という意味に解釈されることが、意図的關係づけであると解釈しているようである。また、寺村 (1983) は、「一般に、Pの生起のあと、それと全く無関係に、偶然別のことQが起こった、という場合はアトデの方が適切だということはまちがいないと思われる」という点も指摘している。

安達 (1995) では、「久野の一般化の問題点を、『主語の意図的計画』という概念が明確さを欠くという点にあると思われる」と指摘しつつ、久野の主張から導かれる、以下の3つの予測を検討し、久野の主張を再検討している。

- ① テカラは意図を持たない主語は取れない。
- ② テカラの前件と後件の主語は同じ。
- ③ テカラが使われている文はアトデで置き換えることができる。¹⁾

①について、安達は前件、後件のそれぞれが意図でコントロールできない場合に、「～てから」の適格性が低くなる例を指摘してい

る。

(8) ?学校に行く用意ができてから家を出た。

(9) いいアイデアを思いついてから論文を書き始めた。

(10) 王将で食事を{?してから/したあとで”喫茶店の前でぼったり卓に出会った。

(8)(9)は前件が意図でコントロールできない例であり、(10)は後件が意図でコントロールできない例である。いずれも「～てから」の適格性が低いことから、安達は「久野の一般化はこれらの例に関しては正しい予測をしているように思われる。」としている。

しかし、「久野の一般化に対して反例となる例がいくつか存在する。」として、以下のような例を提示している。

(11) ひと通り皆の手に渡ってから、木の盤はふたたびスウの手に戻った。

(12) うちを出てすこし歩いてから、口紅をつけ忘れたことに気づいた。

(11)は前件が無生物主語を取るもの、(12)は後件が「気づく」という主体の意図でコントロールできない述語であるが、いずれも「～てから」が用いられている。ここから、安達は、「久野の一般化には修正が必要であることが分かる。」と結論している。

②③についても、それぞれ、

(13) 昨夜は外回りの山田さんが戻ってきから帰りました。

(14) 哲夫は階段のいちばん上まで{来てから/*来タアトデ}立ち止まった。

という反例を挙げ、②③が成り立たないことから「アトデによる出来事の接続にも独自の意味的制限を設定する必要があることが分かる。」とまとめている。

その上で、安達 (1995) は、『意図性』はある条件下で派生する意味だと考えたい」とし、「～てから」を「～まで」と対立する形

式であるとして、以下の図式を示している。

(15) PテカラQ → PマデQシナイ
安達は、ここからの派生で意図性が生じることを、「同様の観点は、寺村（1983）の分析が採るところである」としている。しかし、寺村が意図性を情意の表現に限っている点については、(16)のように「単純な伝達の文でも意図性が生じる例はある」として退けている。

(16) 梅田で本屋に寄って本を一冊買ってから大学に向かった。

杉本（1996）では、主に「～てから」が直後、「～あとで」が不特定の時間がたった後、という点について検証を行っている。これらの反例を示した後で、杉本は、「～あとで」を「S₂の成立の時点を示すために、S₁に目印となるような具体的・印象的な出来事を示し、その目印の後にS₂が起こったと述べることだと考える」とし、「目印であるから、S₁はS₂より印象度（あるいは出来事のスケール）が大きい。＜中略＞即ち、S₁ ≧ S₂という関係が考えられる。」としている。一方、「～てから」については、「そのような制約を受けない」とした上で、「『～てから～』の文では、S₁とS₂の成立の時間的順序を明確にするのがその主たる目的であるからである。」とまとめている。

杉本（1996）は、久野の意図的な時間的前後関係については、「基本的には久野（1973）の言う通りである」としつつ、誰の意図であるか、という点については、(17)(18)のように「S₁が無意思表現、S₂が意思表現という場合にも、主体の意図的な前後関係が窺われる」ことを指摘し、「『S₁の主語の意図的計画』ではなく『S₂の主語の意図的計画』とすべきであろう」と主張している。

(17) 子供が寝静まってから、彼女はテレビをつける。

(18) 会議が終わってから、残りの仕事を片

付ける。

一方で、杉本は、S₁とS₂が共に無意思表現の場合にも、「～てから」の文が成立することを示し、

(19) 東京オリンピックが終了してから、長男が生まれた。

(20) 山桜は新芽が出てから花が開く。

(21) 会議が始まってから気がついた。

「これらの文では『主体の意図的な前後関係』はもちろん全く見られない」としている。

2.3 水野（2001）・野村（2009）の研究

水野（2001）・野村（2009）の研究は、いずれも日本語教育の観点から、「～てから」と「～あとで」の違いを考察したものである。水野（2001）では、「『て』が連続性を表し、『た』が断絶を表すことが『～てから』『～たあと』の比較において基本的な差をもたらすのであり、それ以外の要素は本質的ではない」とし、「連続性」と「断絶性」を両者の違いの中心に据えている。

その上で、水野は「～てから」は「～たあと」に比べて後件にフォーカスが置かれることを指摘した上で、「後件に比重を感じた時、そこに予測性が生まれる余地が生じる」とし、「～てから」には「予測性」という意味を付け加えている。一方、「～たあと」については、「二つの事柄を前件順に淡々と描写するので、事柄の前後関係の意識はあっても、予測性は出てこない。」とし、「『～たあと』の後件の内容は、非日常的かつ意外性に傾く傾向があるのではないか」としている。

野村（2009）は、「～てから」の意味機能を「予測性」と「順序性」とし、「～たあとで」の意味機能を「非予測性」「断絶性」として、検証を行っている。その上で、「現代日本語母語話者『Vてから』を多用している」とし、日本語教育の現場では、「基本的に

『Vてから』を使用するように指導し、但し、前件の行為にくぎりをつけて次の行為に重点を置き、意味の中心を後項の動詞に置く場合、かつ、後件に『予期していなかったこと』を言いたい場合のみ『Vたあとで』を使用するという説明が、誤用又は違和感のある文の回避に繋がると思われる。」と提言している。

久野の意図的な時間の前後関係については、水野は「『意図性』より『連続性』がこの場合適当なのではないか」とし、野村では、使役形の使用を分析した上で、「『Vてから』も『Vたあとで』も同様に、意図的な時間関係がある場合もない場合も成立することが明らかになった。」としている。

2.4 先行研究のまとめと本研究の目的

久野(1973)で提出された、「意図的な時間の前後関係」という概念を巡っては、その後の研究で、少なくとも次の点は明らかであると考えられる。まず、安達(1995)、杉本(1996)で指摘されたように、前件・後件とも無意思的表現であっても、「～てから」が適格になる用例があり、「～てから」の全てが意志的な時間の前後関係を表すとは言えない。一方で、安達(1995)の(8)–(10)のように、意図性の有無によって「～てから」の適格性が下がるように見える例があるのも事実である。また、杉本(1996)が指摘するように、意図性の主体は、前件の主語とは考えられず、後件の主語とすべきである。

ここから、寺村(1983)や安達(1995)のように、「意図性」を「順序性」から派生するものとして取り扱う見方は有効であるようにも見える。しかし、寺村の「情意の表現」という条件は安達において否定されており、どのような場合に「意図性」が派生するかについては、はっきりしない。安達の(16)は前件・後件が同一主語である場合であるが、杉村

(1996)の(17)(18)のように、前件が異主語の場合にも言い切りの形で「意図性」が派生するものもある。さらに、

(2) 午前中は雨が降っていたためフライトは行わず、午後には雨が止んでから訓練を行いました。

のように、前件がコントロール不能な自然現象が来る場合にも意図性が感じられる用例が存在する。

また、野村(2009)では、「前件後件共意思動詞の場合、前件後件は意図的な関係があると解釈できる」として、意図性による「～てから」と「～あとで」の使い分けを否定しているが、久野の言う「意図的な時間の前後関係」は、前件、後件のそれぞれが意思動詞であるか、ということとは別の概念であると考えられる。つまり、前件と後件がそれぞれ意志動詞であっても、「両者を結び付ける何らかの意図」がなければ「意図的な時間の前後関係」とは言えないし、上段で述べたように、前件が無意思的表現であっても、「前件の完了を待って後件を行う」という意味であれば、「意図的な時間の前後関係」は成立するのである。

最後に、水野(2001)の連続性・断絶性の対立は有効な概念であると思われるが、それが実際の使用にどう反映されるかが判然としないという欠点があると思われる。水野の提出した予測性という概念によって説明できる用例も存在するが、例えば安達の(12)、杉本の(2)のような用例については、予測性では全く説明がつかない。

以上のことから、本研究では、水野(2001)の連続性・断絶性という着想は踏襲しつつ、それがどのような形で久野(1973)の「意図性」を派生するかという点を中心に用例の分析を行っていく。

3. 研究の方法

本研究では、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いて、「～てから」と「～あとで」の用例を収集し、分析を行う。但し、分析の対象とする用例には一定の制限が必要である。久野も指摘しているように、「～てから」は継起を表すだけでなく、「～以来」の意味を表すことができる。一方で、「～あとで」は「～以来」の意味を表すことはない。久野は、『テカラ』が『直後』の意味に用いられることと、『以来』の意味に用いられることとの間には、何か関連があるに違いない」としているが、本研究の目的は「継起性」の解明であること、そのために「～あとで」との比較が中心になることから、「～以来」の意味を表す「～てから」は分析の対象から除外することとする。

3.1 小野矢 (1980) の研究

小野矢 (1980) では、「～テカラ」には、「～シタ直後」と「～シテ以来」の二つの意味があることから、何に基づいて、この二つの意味が区別されるのかを分析している。それぞれの意味を表す小野矢の例文を以下に挙げる。

㉓ 時枝は薄暗くなってから帰ってきた。

㉔ 戻ってきてから黙りこんでいたシンイチがふいに口を開いた。

小野矢 (1980) は、㉓が「薄暗くなった、そのあとで、帰ってきたという、出来事の順序を、時間の進行にしたがって述べた表現で、これが『テカラ』の『直後』の意味にあたる」とし、㉔を『黙りこんでいた』が、時間的な幅をもった継続的な過程を表わし、『戻ってきてから』がその過程の起点を表わしている表現で、これが『テカラ』の『以来』の意味にあたる」として両者を区別している。その上で、小野矢は、この違いが「主節の述語

の意味的、形態的な特徴によるところが大きいだらうという予想が立った」として、主節の述語による分析を行っている。

小野矢は、まず、主節が現在形の文から始め、主節の述語が継続動詞、瞬間動詞の場合は、一般的に「直後」の意味で用いられるとしている。次に、状態動詞については、用いられ得る場合もあろうが、それができないことの方が多しとした上で、用いられる場合は「以来」の意味を表わすとし、第四種の動詞については、「この種の動詞の性質として、テカラ構文の主節述語になじまないものであると思われる。」としている。

次に、瞬間動詞にテイルが付いた場合について、「結果状態」と「事後確認」という2つのアスペクトの意味を区別し、「～てから」の意味が変わってくるとしている。

㉕ あの街灯は近くに雷が落ちてから消えている。

この例文では、「あの街灯は、近く雷が落ちてからずっと消えたままだ」という結果状態の意味では、「～てから」は「以来」の意味となり、「あの街灯は、近くに雷が落ちてから消えたのだ」という事後確認の意味では「直後」の意味になるとしている。

継続動詞のテイルについては、小野矢 (1980) は、「現在の状態」「進行・継続」「習慣」「経験」「事後確認」の5つの意味を区別し、分析している。このうち、「現在の状態」および「進行・継続」については、「以来」の意味になる。これに対し、「習慣」「事後確認」については「直後」の意味となる。「経験」については、経験を表す文脈では「以来」になるが、「事後確認」と同じ意味に解釈できるようになる場合もあり、その場合は「直後」になるとしている。

形容詞文が主節となる場合について、小野矢は「～てから」の意味は「以来」であると

している。また、「これらの形容詞は、状態を表わしはするが、属性のような恒常的な状態というより、一時的なものだと思われる。」点も指摘している。名詞文については、動詞文が名詞化された(26)のような場合を除き、「以来」の意味になるとしている。

(26) きょうは、仕事が済んでから、マージャン大会ですよ。

次に小野矢(1980)は主節が過去形である文について、いくつかの例を提示している。まず「状態変化を表わす『ナル』は、いささか変わった様相を呈するようだ」として、以下のような例を示している。

(27) 「でも、病院で大事にしていた髪を切られてから、なりふり構わなくなったわ。(略)」

この例について、小野矢は「単純に、状態変化を表わすというだけでは不十分で、＜中略＞状態性の意味を読み取って、その状態が現在も継続しているというニュアンスが含まれていると思われるのである。」として、「『テカラ』は『以来』の意に解され、またそうする方がよりよい解釈である。」と述べている。

最後に、継続動詞の過去形の場合について、直後の意味になる例を述べた後で、以下のように、「～てから」が「以来」の意味に解される例を紹介している。

(28) 彼女は、十年前に夫を亡くしてから、三人の子供をかかえて、がむしゃらに働いた。

3.3 分析の枠組み

以下、小野矢(1980)の研究に基づき、継起を表すものとして、本研究の対象とするものと、「～以来」の意味を表わすものとして除外するものについて、整理する。ここでは、用例から見つけた、継起を表さないと考えられる用例についても触れつつ、分析の対象を

絞り込む。

小野矢(1980)でも述べられていた通り、後件が、形容詞述語文・名詞述語文の場合は基本的に「以来」の意味となるため、除外することとする。本研究の分析の対象となるのは後件の述語が動詞の場合のみである。また、後件に状態動詞が来る場合には、「～てから」は「～以来」を表すようになり、事態の継起ではなくなる。

(29) それより、新海さん、あんたの方だ。

新海さんに会ってから、気分が全然ちがうし、運まわりも逆転しはじめてる気がする。あんたには、何かあると思うよ。この場合は、「気分が違う」の起点を「～てから」が表しており、事態の継起を表すものではない。

主節がテイル形となる場合については、小野矢の指摘に従い、個々に「継起」なのか「以来」なのかを判断していくものとする。さらに、小野矢も指摘しているように、「～なる」に代表される変化を表す動詞によって、状態の変化を表す場合も、「～以来」を表すと考えてよい。

(30) だから下北は羽住のことを「あの野郎」呼ばわりする。二学期が始まって、夏期休暇中の課題を下北がまったくやってこなかったせいで羽住の辛辣な苦言を受けてからは、特に険悪な雰囲気になっているようだ。

(31) ビタミン、ミネラルで試合前の体調を整える。これは末續もはっきり自覚している。「栄養サポートを受けてからケガが圧倒的に少なくなった。言われてみれば最近ケガしてませんね」と語っているのだ。

これらは、前節で表される事態の後に、「～なる」という変化が起こったと捉えることもできるが、変化後の状態は現在までも続いて

いるのであり、実質的には状態の起点として捉え、分析の対象からは除外する。

最後に、(28)のように、継続動詞で、テイル形を取らず、「以来」の意味になるものについて考える。以下のような用例が該当すると考えられる。

(32) 僕が医者の家に住むようになってから、僕は彼の娘の伴奏をします。

(33) 免許を取ってからいろいろな国産車に乗り、バワリーキッチンをオープンしてから念願だった'六十七年型キャデラッククーペデビルを買いました。

両者に共通するのは、主節の述語がスル形であっても、一回の動作ではなく繰り返しの動作を表していることである。小野矢の(28)においても、「働く」が一回の動作ではなく、何度も繰り返される動作を表している。このような場合も、「以来」の意味を表すものとして、分析の対象からは除外した。

さらに、用例を見て行く中で、継起とは判断できないものとして、以下の三つの場合も除外した。まず、後節に否定形が来る場合も「継起」を表すとは言い難い。

(34) 電話を切ってから、彼は自分が何をしたらいいか考えつかなかった。気まぐれにブロンクスまで地下鉄に乗り、何時間か動物園で過ごした。

(35) 宮中へ来てからだれかとうちとけて話すことなどなかった音羽は、せっかくできたこの話し相手を失うのが、少しさびしくもあった。

(34)のような場合では、「考えつかない」は事態の不在であり、継起とは考えられない。(35)の「～てから」は「以来」の意味となり、継起を表さない。

次に、「～てから」の後に「～まで」が来る場合も分析の対象から除外する。

(36) 一般に、電話番号をメモで調べてから

電話をかけるまでの間とか、項目のページを索引で調べてからそのページを開くまでの間などのように、ほんのわずかの時間に比較的少ない情報を貯えておく記憶を「短期記憶」という。

これは、「～てから」と「～まで」で表される事態の期間を表し、主節を期間によって限定するため、継起を表さない。

最後に、後件に期間を表す時間表現が来る場合も除外することとした。

(37) 相手は、三百万円以上する車を、月賦で購入した客だった。契約が済んでから、既に三カ月が経過していて、支払いも二回終わっていた。

「経過する」などを事態として捉えれば、継起と考えられなくもないが、これらはむしろ前件の事態を起点とし、時間の経過を表すものであり、「以来」の意味に近いと考えるためである。

以上の通り、本研究では、後件の述語が状態動詞以外の動詞の場合で、それが一回性の動作・変化を表す場合を中心に用例を分析していく。このようにすることで、前件・後件のそれぞれが、一回性の事態ということになり、継起性という意味で「～てから」と「～あとで」の意味の違いが比較しやすくなると考えるためである。

4. 分析と考察

4.1 排他的な用例

まずは、「～てから」と「～あとで」が互いに置き換えられない場合について見ていく。前件で表される事態が、後件で表される事態の準備となっている場合、「～あとで」には置き換えにくいように思われる。

(38) いつものようにシューキーパーをはめてからローファーをしまいこみ、スーツを鞆の仕切りの中にきれいにおさめた。

着た服や下着もすべて袋につめた。

(39) 診察の予約を入れてから、クリニックを訪れました。佳子さんは初め、クリニックの前を通り過ぎてしまい、しばらく辺りを探してしまいました。

(40) 上衣のポケットにアーミーナイフを入れてマンションを出た。雨は上がっていた。空は曇ったままだった。車は建物の裏手の駐車場に置いてある。エンジンをしっかり温めてから車を出した。

この違いは、命令などの形になると、よりはっきりと感じられる。

(37) シューキーパーをはめてから靴をしまってください。

(38) 予約を入れてからクリニックに行ってください。

(39) エンジンをしっかり温めてから車を出してください。

この場合、後件を行うための準備として、前件を行うという意思性が感じられる。これを「あとで」に置き換えてみると、2つの事態が断絶してしまい、意思性は感じられなくなる。

(38) 予約を入れた後で、クリニックに行ってください。

やや不自然な印象があるが、例えば、家政婦に今日やることを順番に伝えているような文脈では、成立可能である。予約とクリニックを完全に切り離してしまうと、「～あとで」でも全く問題がなくなる。

(38) 美容院に予約を入れた後で、クリニックに薬を取りに行ってください。

次に、「～あとで」では問題がないのに、「～てから」に置き換えると不自然な例を見ていく。久野も指摘している通り、前件の事態が、後件の主体のコントロールの外にある時、「～てから」の適格性は低くなるように思われる。

(40) あるいは彼女が仕事中にコーヒーを注いだか。カルドーニが姿を消したあとで、フランク・ジャフィと一度飲んだんだ。

(41) このときのおじいさんの気持ちはどうだったのかということで、バブルが崩壊したあとで話を聞きに行ったことがあります。

(40)では、「カルドーニが姿を消す」という事態は、語り手によってコントロールできる事態ではない。(41)においても、前件の事態は後件の主体のコントロールの外にある。

しかし、次のような場合は、前件がコントロール不可能な事態であっても、「～てから」が使われている。

(42) お父さんの仕事場は、新宿駅の中央線快速上りホームで、電車が発車して人波が消えてから活動を開始した。ごみ箱に捨てられた新聞・雑誌はどのみちリサイクル用であり、その意味ではお父さんたちの商売はもうひとつのリサイクルといえた。

(43) ようやく信号が青になり、海道は交差点を渡った。女子高生たちが笑いさざめきながら、ファミリー・レストランの出入口から一団となって通りに溢れ出てくる。海道は女子高生たちが通り過ぎてから店に入った。

いずれの場合も、「～あとで」に置き換えても適格であるが、「～てから」の場合は前件が終了するのを待って、後件を行うという意味が出てくる。

また、前件の事態が後件の主体によってコントロール可能な場合であっても、「～てから」の適格性が低い場合も見られる。

(44) その日竹俣当綱は夕刻にいったんノ丸会談所の奉行詰の間から下がったあとで、夜になってふたたび家を出て登城した。従僕一人を連れただけのひそかな登

城だった。

- (45) ワードとかエクセルのライセンスについて聞きたいのですが、ライセンス登録を一度したあとで別のパソコンに移すということでライセンス登録をし直すことができるのでしょうか。

最後に、「～てから」と「～あとで」が問題なく置き換え可能な用例について挙げておく。「～てから」の用例の中に、前件が後件の事態の準備という意味はもたず、単純に事態を時間の順番に並べたようなものがあった。この場合は「～あとで」に置き換えても適格性にほとんど差はない。

- (46) 私は悲鳴をあげそうな気持ちになって、ホテルのマネージャーに電話で抗議した。マネージャーはしばらく事情を調べてから、謝るところかこう答えた。
- (47) このお遍路さんはとうとう行き倒れになって死んだというのだ。お遍路さんは政夫の集落を出てから、六、七里離れた四十三番札所の明石寺へ行った。

4.2 水野（2001）の「連続性」と使い分けの原理

ここでは、水野（2001）による連続性について考えてみる。

- (48) 新製品を衝動的に買っては一度も動かさなかったり、パソコンのパーツを買ってから「あ、これ繋がらない」と気づいたり、酷い浪費ですね。
- (49) その日、日がくれてから、三良は憔悴しきった姿で寺町の浄願寺にもどってきた。自分がどこをどう歩いてきたかの記憶も定かでなく、早くに帰っていた浄円の目に、かれのようすが異様に映った。
- (50) カメラマン村田幸一郎はいったん帰宅して家族に廃刊について話してから、再び会社にとって返した。

まず、(48)の用例から見てみる。これは、「パソコンのパーツを買う」という事態があって、その後に「繋がらないことに気づく」という事態が起きた、ということを表しているのだろうか。現実の事態を考えると、少なくとも、その間に「家に帰る」「パソコンにつないでみる」などの事態が挟まれていると考えられる。むしろ、「パソコンに差してみても繋がらない」ということに気付いてから、それ以前に起きていた「パソコンのパーツを買う」という事態が、失敗という意味で浮び上がってくる、と考える方が妥当ではないか。

(49)も同様に、「三良がもどってくる」という時点で、日が暮れていたものであり、そのことを「日が暮れてから」として付け加えたと考えることができる。(50)では「会社にとって返した」という事態は、そもそも「いったん帰宅して家族に廃刊について話す」という事態がなければ意味をなさない。

ここから、「～てから」は、後件を主たる事態として、それ以前に起きた関連する事態を「～てから」で付け加え、両者を合わせたものを一つの出来事として表すものとして考えてみるができる。水野の「連続性」に近い考えではあるが、二つの事態が連続している必要は必ずしもない。(48)では、パソコンのパーツを買ってきて、しばらく放置してから繋いでみた場合にも言い得るし、(49)は「日が暮れて」ある程度時間が経過してから、三良がもどってきた場合でも言い得るからである。

これに対して、「～あとで」の場合は二つの出来事は互いに独立していると考えられる。

- (51) 呼び出し音はすぐに聞こえてくる。呼び出し音を二度聞いたあとで、はたと我に振り返りあわてて電話を切る。立花光輝が出たらどうするつもりだったのだろう。
- (52) 喉が渇いたときには、飲んでしまっ

「あーおいしかった」と満足したあとで、大丈夫かしらと後悔することもしばしばです。

いずれの場合も、前件の事態は出来事の出来事とは独立して成立しており、前件の出来事が成立し、その後どのような出来事が起きるかが問題になっている。

以上のことから、「～てから」と「～あとで」の違いを次のように規定することとする。
～てから：後件が既定の事態としてあり、前件は時間的に後件より先にある事態を、後件の成立に何らかの意味で関わるものとしてつなげ、一つの出来事として表す。

～たあとで：前件の出来事が成立したということを表した上で、後件はその後成立した出来事を表す。

「～てから」が2つの事態をまとめて一つの出来事として表すのに対して、「～あとで」が2つの出来事とその順で継起することを表すことを、両者の意味の中心と見なすのである。

4.3 久野 (1973) の意思性について

ここでは、4.2の違いによって、久野 (1973) の意思性がどのように生じるのかについて考察する。その上で、4.1の観察結果についても説明を試みる。

52) きょうは、銀行へ(行ってから/行ったあとで)、買い物をしてきます。

52) 「～てから」「～あとで」どちらも適格な文であるが、両者で情報のフォーカスに違いがあるように感じられる。具体的には、「～てから」の場合は、「買い物に行く」ことは日常的な事態で、「その前に銀行に行く」ことにフォーカスがあるのに対して、後者では「銀行に行く」ことが日常的な事態であり、「その後買い物をしてくる」ことにフォー

カスがあるように感じられる。

これは、4.2の説明によって解釈可能である。この文は意向を表すものであるが、「～てから」の場合は、「銀行に行ってから買い物をする」という二つの事態がまとめて一つの出来事として意向の内容となる。結果として、両者をこの順番で行うことが指向され、久野の言う意思性が表される。しかし「～たあとで」の場合は、「銀行に行く」という出来事は独立に成立して、その後何をすることが問題になるため、意向の内容は「買い物に行く」ことが中心となる。このことから上記の意味の違いが生じると考えるのである。

過去の出来事の場合にも同様の違いが考えられる。

53) 夕食を食べてから、映画を見に行った。

54) 夕食を食べた後で、映画を見に行った。

53)においては、「夕食を食べてから映画を見に行く」がひとまとまりの出来事として捉えられる。ここから、「夕食を食べる」以前から決まっていた事態であるという含意が生まれる。これに対して、54)では、「夕食を食べる」という事態は単独で完了する。ここから、夕食を食べる時点では、その後何をするのかは決まっておらず、「夕食を食べる」という事態が成立後に「何をするのか」という意思選択が行われた、という含意が生まれる。これが、久野 (1973) における「意図性」が派生するメカニズムであると考えられる。

図1のように、前件の事態が起きる以前から、後件の事態を行う意思決定がなされている場合、前件と後件は主体の意思によって結びつけられるのであり、意思性があると判断される。これに対して、図2のように、前件の出来事が成立した後で、後件の意思決定がなされた場合には、前件の出来事と後件の出来事は主体の意思によっては結びつけられずに、意思性はないと判断できる。

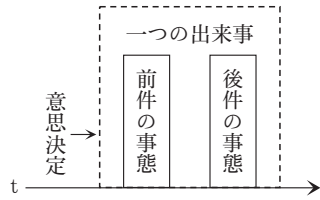


図1 「～てから」(意思性あり)

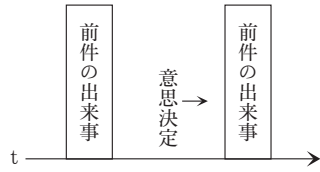


図2 「～あとで」(意思性あり)

ここから、4.1の観察結果について、説明していく。(37)～(39)の、前件が後件の準備を表すような場合については、以上の説明がそのまま適用できる。準備とその結果なされる、後件の事態は一体の出来事としてとらえられるからである。

次に、前件に非意志的な事態が来る(40)～(43)について見てみる。4.1で見たように、(40)(41)については、「～てから」が不適格なのに対して、(42)(43)については、「～てから」が使われている。両者の違いとしては、まず、「～てから」が使える(40)(41)では、前件が、後件の主体によってその成立が予想可能な事態であることが挙げられる。「人波が消える」も「女子高生が通り過ぎる」も、その時間までは予測できないにしても、いずれは確実に成立することが予想可能である。予想可能であれば、後件の主体の「～を待ってから～する」という形で一つの出来事としてまとめることができる。

一方、使えない(42)(43)については、前件成立前に、その出来事が起きるかどうかも含めて予想が困難な出来事であるということである。実際に成立するかどうか不明なのであるから、「～を待ってから～する」ということも

不可能である。これが両者の違いにつながっている。

(44)(45)についても、同様に考えることができる。(44)の場合、必ずしも「～てから」が不可能ではないが、その場合は「下城する前から登城することを考えていた」という竹俣当綱の意図を含んだ表現になるとと思われる。客観的描写の表現としては、やはり「～あとで」の方が適切である。(45)では、「一度ライセンス登録をする」という事態が成立した後で、「パソコンが故障するなどして、別のパソコンに移す」という必要が偶発的に生じ、それによって、「ライセンス登録をし直す」ということになる。ライセンス登録をする時点で、ライセンス登録をし直すことは考え難いので、「～あとで」の方が適切である。

最後に、(46)(47)の例について説明を試みる。いずれの場合も、第三者の行動を客観的に描写した文になる。「～てから」が無生物主語を取る(55)のような文も同様であるが、

(55) 衝撃が三回続いてから、船のスピードが急に落ちた。サイズモアが艦橋から走り出て来て、両手を口に当てて言った。この場合は、主体の意図性によって二つの出来事をつなぎ、一体化することは不可能である。このため、単なる時間的近接性によって、一体化するということになっていると考えられる。

5. まとめと今後の課題

以上、「～てから」と「～あとで」の使い分けについて、用例を用いて分析し、「～てから」が二つの事態を一体化させて一つの出来事として見なす表現であるのに対して、「～あとで」はそれぞれの事態を独立したものとして見て二つの出来事として見なす表現であることを両者の違いとして設定した。その上で、「～てから」が二つの事態を一体化

させるための媒体として、主に1) 主体の意思によって結びつける、2) 客観的な時間の近接性によって結びつける、という場合があり、前者から久野の言う意図性の発生するを考察した。

しかし、日本語において継起を表すことができる表現はこの2つだけではない。「はじめに」で述べた通り、「～て」や連用形接続、条件節、理由節なども継起性を含み得る。何より、工藤の指摘した、完成相の文は、これらの従属節によるものとは違った位相で継起を表すものと予測できる。

筆者の目標は、現実世界で起こる様々な事態を、日本語でどのように言語化し、並べることで出来事として表現していくのか、ということにある。そのためには、こうした多種多様な継起性の表現についての、さらなる分析が必要である。今後の課題としたい。

注

1) 原文では、「(1) アトデが使われている文はテカラで置き換えることができる。」となっているが、その後の分析内容から見て、「アトデ」と「テカラ」を間違えて入れ替えてしまったものと判断した。

<参考文献>

安達 太郎 (1995) 「テカラとアト(デ) - 出来事の継起的接続 -」『日本語類義表現の文法(下) 複文連文編』pp.547-543 くろしお出版
工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房

工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ研究叢書(言語編) 第111巻

久野暲 (1973) 『『テカラ』、『アトデ』、『アトニ』と『アト』』『日本語文法研究』 第11章 pp.96-101

言語学研究会・構文論グループ (1988a) 「時間状況をあらわすつきそい・あわせ文(1) - つきそい文が『してから』のかたちをとる場合 -」『教育国語 92』むぎ書房

言語学研究会・構文論グループ (1988b) 「時間状況をあらわすつきそい・あわせ文(1) - つきそい文が『したあと』のかたちをとる場合 -」『教育国語 93』むぎ書房

小野矢哲夫 (1980) 『『～テカラ～』という構文をめぐって』『日本語・日本文化 第9号』pp.67-89 大阪外国語大学留学生別科

杉本和之 (1996) 『『～たあとで』と『～てから』』『愛媛大学教育学部紀要 人文・社会科学 第29巻 第1号』pp.37-44 愛媛大学教育学部

須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房

寺村 秀夫 (1983) 「時間的限定の意味と文法的機能」『副用語の研究』pp.233-266 明治書院

仁田義雄 (2016) 『文の事態類型を中心に』くろしお出版

野村登美子 (2009) 『『Vてから』と『Vたあとで』の意味交渉のメカニズム - 日本語学習者の誤用を手がかりに -』『言語コミュニケーション文化 7(1)』pp.113-128 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会

水野マリ子 (2001) 『『～てから』と『～たあとで』 - 文の切れ続きに関する一考察 -』『神戸大学留学生センター紀要 7』pp.71-79